

秋本 隆之

t.akimoto@cc.kogakuin.ac.jp

(工学院大学)

【要旨】

本研究では、日本語の「動詞由来複合語」の中でも述語として機能するタイプ（述語 X-V 複合語）に焦点を当て、その形態統語構造について新たな分析を試みる。「手洗い」のような述語 X-V 複合語が通常の動詞述語（例：洗った）と一線を画す特徴の一つとして、時制辞などの後続要素とは直接付加できず、「ス(ル)」の介在が義務的に必要となることが挙げられる（例：*手洗った／手洗いした）。しかし、「ス(ル)」がなぜ義務的に必要となるかについてはそれほど積極的な議論はされていない。本研究は、Song (2020)で提案された範疇未指定主要部を援用し、述語 X-V 複合語の派生には、(i)主要部と主要部の併合、および、(ii)範疇素性の共有によるラベル付けが関与すると提案する。本分析により、「ス(ル)」の義務的介在性だけでなく、(a)述語 X-V 複合語内部での自他交替（例：値上がり・値上げ）、(b)軽動詞残留省略における付加詞読みの有無、(c)「方」名詞化における「の」の標示についても正しく予測されると論じる。

キーワード：動詞由来複合語、軽動詞、範疇(素性)、ラベリング、分散形態論

1. はじめに

日本語の「動詞由来複合語」は、生産的な語形成の一つであり、「内項+動詞」から構成されるタイプと「修飾要素+動詞」から構成されるタイプに大別される（伊藤・杉岡 2002；長谷川・大関 2020）²。本稿では、(1)に例示するような「修飾要素+動詞」から構成され、述語として機能する動詞由来複合語（「述語 X-V 複合語」）に焦点を当てる。

(1) 手洗い、ペン書き、早食い、値引き、立ち読み、船積み ...

日本語の述語 X-V 複合語は、第二要素が品詞的には動詞であるものの、(2a)に示すように、時制辞などの後続要素とは直接付加できず、「ス(ル)」の介在が義務的に必要となる。一方で、通常の動詞述語や英語の *hand-wash* は直接時制辞が後続することができる(2b, c)。

- (2) a. 母が洗濯物をすべて手洗いした。(cf. *手洗った)
 b. 母が洗濯物をすべて手で洗った。(cf. *洗いした)
 c. My mother *hand-washed* all the laundry.

「ス(ル)」が英語の *do* 挿入のような、単に時制辞を支持する形態ではないことは、否定辞(-nai)、受身(-are)、使役(-ase)、アスペクト動詞(続ける)などが続く場合にも現れることから示される。

(3) 手洗い{しない・された(s-are)・させた(s-ase)・し続ける}

動詞由来複合語の分類やその内部構造については多くの研究がある（Sugioka 2001；伊藤・杉岡 2002；Yumoto 2010）一方で、なぜ日本語の述語 X-V 複合語には「ス(ル)」が義務的に必要となるかについては

¹ 本発表の構想段階において依田悠介氏から大変有益なコメントを頂いた。記して感謝申し上げる。本研究は、JSPS 科研費 19K13185 の助成を受けたものである。

² 伊藤・杉岡（2002）は前者を「内項を含む動詞由来複合語」、後者を「付加詞を含む動詞由来複合語」と呼ぶ。

管見の限り、それほど積極的な議論はされていない。本研究では、分散形態論の枠組みから述語 X-V 複合語の内部構造を再考し、「ス(ル)」挿入を駆動する形態統語的原理を探る。

本稿の構成は以下のとおりである。次節で、述語 X-V 複合語の特徴について、X の意味役割、X の品詞、連濁の点から整理する。3 節では、述語 X-V 複合語の内部構造について新たな提案を行い、本提案から「ス(ル)」の義務的介在性および、2 節で見た諸特徴が導かれることを論じる。4 節では、本提案のさらなる証拠として、(a) 複合語内部の自他交替、(b) 軽動詞残留省略における付加詞読みの有無、(c) 「方」名詞化における「の」の標示についても正しく予測されると論じる。5 節で、本稿のまとめを行う。

2. 日本語の述語 X-V 複合語

日本語の述語 X-V 複合語については、上記で見た「ス(ル)」の介在に加え、いくつかの特徴がある。述語 X-V 複合語の分析に入る前に本節では、その特徴について、修飾要素である X の意味役割、X の品詞、連濁の点から整理する。

まず、述語 X-V 複合語の X には「道具」、「着点」、目的語の「所有物」、「対象」など様々な意味役割を持った要素が入る。

(4) X の意味役割

- a. 道具 : ポスターをのり付けする (ポスターをのりで付ける)
- b. 着点 : 荷物を船積みする (荷物を船に積む)
- c. 所有物 : 商品を値引きする (商品の値を引く)
- d. 対象 : プラモデルに墨入れする (プラモデルに墨を入れる)

次に、述語 X-V 複合語の X には名詞、形容詞、動詞、副詞 (オノマトペ)、接続詞、接辞など品詞語幹が入り得る。

(5) X の品詞

ワープロ_N書き、早_A食い、立ち_V読み、ガブ_{Adv}飲み、ながら_{Conj}食い、小_{Aff}回り

最後に、述語 X-V 複合語は連濁が起こる。

(6) 連濁

横取り (よこどり)、手書き (てがき)、膝蹴り (ひざげり)

どのような枠組みであれ、述語 X-V 複合語において、(a) 「ス(ル)」の介在が義務的である、(b) X の意味役割および品詞に柔軟性がある、そして、(c) 連濁が起こる (もしくは、起こりやすい) といった言語事実をできる限り予測できる分析が必要となる。

では、なぜ「ス(ル)」の介在が必要なのだろうか。いくつかの可能性が考えられるが、述語 X-V 複合語が単に「複合語」だからという理由で「ス(ル)」の介在が起こるわけではない。このことは、(7) に示すように、「動詞+動詞」の「複合動詞」には「ス(ル)」の介在が起こらないことからわかる。

(7) 母が洗濯物の汚れを洗い落とした。(cf. *洗い落とし した)

次に、「述語 X-V 複合語」の範疇が動詞ではなくなっているという理由が考えられる。つまり、「複合動詞」は範疇的に V として機能するために、通常の動詞述語のように「ス(ル)」の介在が起こらない一方で、「述語 X-V 複合語」は範疇的には V ではなく N となっているために、「ス(ル)」が必要となる³。たしかに、(8a)が示すように、「述語 X-V 複合語」は格を伴って名詞としても機能することができるが、「述語 X-V 複合語」が「ス(ル)」と共起する場合にも「名詞性」をもっているかについて断定す

³ 例えば、伊藤・杉岡 (2002) は動詞由来複合語の範疇を VN ([+V]素性を持った名詞)、Tatsumi (2016)は全体の範疇を n とする分析を提案しており、由本 (2014)は「述語名詞」と読んでいる。

る根拠はないと思われる。「膝蹴り」を例に取れば、格を伴って名詞として機能する場合は「形容動詞+な」(例：強烈な)による修飾が可能だが、「ス(ル)」と共起する場合には「形容動詞+な」による修飾はできず、「形容動詞+に」(例：強烈に)のように副詞として修飾する必要がある。

- (8) a. 太郎が 次郎に 膝蹴りを した。
 b. 太郎が 次郎に 強烈な 膝蹴りを した
 c. 太郎が 次郎に 強烈 {に/*な} 膝蹴りした

このことは、「述語 X-V 複合語」は N ではなく、「述語 X-V 複合語」自体、もしくは「述語 X-V 複合語+ス(ル)」で V として機能している可能性を示唆する。

では、V として機能しているとすれば、なぜ通常の動詞述語(や複合動詞)とは異なり、「ス(ル)」が必要となるのだろうか。考えられるのは、「述語 X-V 複合語」常の動詞(や複合動詞)とは異なる方法で派生され、派生における形態的理由で、「ス(ル)」挿入が駆動されるという可能性である(西山 2018)。本稿では、この立場から説明を試みる。

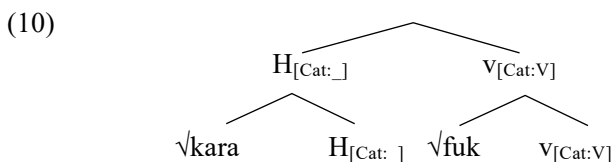
3. 提案

「述語 X-V 複合語」の分析に先立ち、本研究で重要となる仮定を以下に導入する。

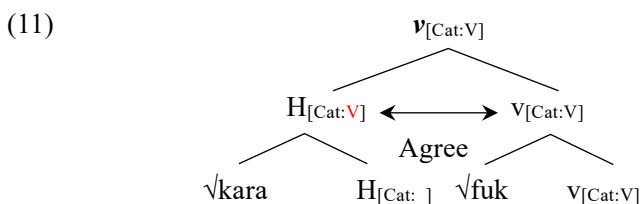
- (9) a. 範疇はあらかじめ決まっているわけではなく、語根($\sqrt{\text{ROOT}}$)と範疇指定主要部($v_{[\text{Cat:V}]}$, $n_{[\text{Cat:N}]}$, $a_{[\text{Cat:A}]}$)の併合によって、統語的に決定される (Marantz 1997)
 b. 動詞の内項は v によって、外項は Voice によって導入される (Kratzer 1996; Basilico 2008)
 c. 範疇化辞には、範疇素性が空となっている範疇未指定主要部($H_{[\text{Cat:}]}$)がある (Song 2020)
 d. 通常の動詞述語は、Voice まで主要部移動する。
 [VoiceP 外項 [vP 内項 [$\sqrt{\text{ROOT}}-v$]] $\sqrt{\text{ROOT}}-v$ -Voice]

これらの仮定を前提とし、「述語 X-V 複合語」は以下のように派生されると主張する。

派生段階 1：動詞部(V)は語根 ($\sqrt{\text{ROOT}}$) と範疇指定主要部($v_{[\text{Cat:V}]}$)の併合によって、修飾部(X)は、 $\sqrt{\text{ROOT}}$ と範疇未指定主要部($H_{[\text{Cat:}]}$)の併合によって形成される



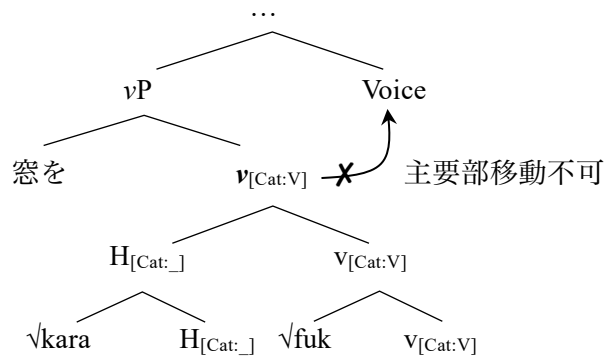
派生段階 2：(10)は、主要部同士の併合 $\{H_{[\text{Cat:}]}, v_{[\text{Cat:V}]}\}$ であるため、そのままではラベルが決まらない (Chomsky 2013, 2015)。そこで、値が未付与の範疇素性を持った $H_{[\text{Cat:}]}$ が探査し、範疇素性を伴う $v_{[\text{Cat:V}]}$ と一致を起こすことで、 $H_{[\text{Cat:}]}$ は値を付与される。その後、範疇素性の共有によって、 $\{H_{[\text{Cat:}]}, v_{[\text{Cat:V}]}\}$ はラベルを得る (ここでは、 $v_{[\text{Cat:V}]}$ とする)。



派生段階 3： v が内項を取り vP を形成し、Voice と併合する。範疇素性の共有によって得られた $v_{[\text{Cat:V}]}$

は統語的な主要部ではないため、Voice への主要部移動はできなくなると考える⁴。

(12)



(9d)の仮定と(12)における主要部移動の不可を踏まえると、通常の動詞述語と述語 X-V 複合語を分けるのは、Voice への主要部移動の可否ということになる。本研究では、「ス(ル)」は Voice によって駆動される形態であると主張し、「ス(ル)」の具現規則を以下のように提案する。

- (13) a. Voice ⇔ *su*
 b. Voice ⇔ ∅ / √ROOT__

(13)は、Voice が語根(√ROOT)と形態的に局所関係にある場合はゼロ形態として具現し、そうでない場合は、「ス」として具現されるというものである。これにより、(14)が示すように、述語 X-V 複合語（例：乾拭きする）では「ス(ル)」が挿入され、通常の動詞述語では「ス(ル)」挿入が起こらないことが正しく導かれる。

- (14) a. [太郎₁ [t₁ [[窓 v[Cat:V] [H[Cat:] √kara H[Cat:]] [V[Cat:V] √fuk v[Cat:V]]]]] Voice(=*su*)] T[_{past}]
 b. [太郎₁ [t₁ [[窓 [√fuk v[Cat:V]]] √fuk-v[Cat:V]-Voice(=∅)] T[_{past}]]]

2節でみた X の意味役割および X の品詞の柔軟性、そして連濁といった諸特徴は(11)の内部構造から説明される。X 要素は語彙的には範疇未指定であり、その範疇や意味解釈は併合する V に依存するため、様々な品詞語幹が生起可能かつ、その意味役割も固定されない。また連濁を起こす形態統語条件として v が H[Cat:] と併合することが一つの可能性として示唆される。

4. さらなる証拠

本節では、本分析を支持するさらなる証拠を提示する。

4.1. 複合語内部の自他交替

本分析では「から拭きする」の形態構造は以下のように記述される。

- (15) から拭きする : [[kara-H] [√fuk-v]]#Voice-T[_{pres}] = 語彙挿入 ⇒ kara-∅-buki-∅-su-ru

「から拭きする」の場合は、v にはゼロ形態が具現されるが、v にも独立した形態が入りうる。Akimoto (2018)は語根が自他交替動詞語根の場合には、自他の形態が v に具現することを提案する。Akimoto (2018)に従えば、述語 X-V 複合語においても、語根が自他交替動詞語根の場合には v に自他の形態が具現することが予測されるが、実際、数は多くないものの、述語 X-V 複合語の中にも自他交替が可能なのが存在する。

⁴ (12)においては{√fuk, v[Cat:V]}だけ Voice に主要部移動することは Minimal Link Condition (Chomsky 1995: 111) 違反となるため不可能。

- (16) a. 政府がタバコの価格を値上げした。
 b. タバコの価格が値上がりした。

「値上げする・値上がりする」は以下のような形態構造を持つ。

- (17) a. 値上げする : [[ne-H] [$\sqrt{\text{ag-v}}_{(\text{caus})}$]]#Voice-T[*pres*] = 語彙挿入 \Rightarrow ne- \emptyset -ag-e-su-ru
 b. 値上がりする : [[ne-H] [$\sqrt{\text{ag-v}}_{(\text{inch})}$]]#Voice-T[*pres*] = 語彙挿入 \Rightarrow ne- \emptyset -ag-ar-su-ru

4.2. 軽動詞残余省略

Hayashi (2015: 71)は、「帰国する」のような漢語動詞+スル構文において、(18a, b)に示すように、「帰国」が省略される場合は、付加詞「LA 経由で」を含む解釈がある一方で、「帰国」が省略されない場合は「LA 経由で」を含む解釈は得られないという観察をする。

- (18) 太郎は LA 経由で日本へ帰国したけど
 a. 次郎は *e* しなかった。(付加詞読み—あり)
 b. 次郎は *e* 帰国しなかった。(付加詞読み—なし)

Hayashi (2015)は、漢語動詞は「ス(ル)」に主要部移動することなく、V 位置に留まるとの仮定のもと、付加詞読みありの(18a)は、VP 省略によって派生されると提案する。

- (19) 次郎は [_{VP} LA 経由で—日本に—帰国]しなかった。

注目すべきことに、(18)と同じ現象が述語 X-V 複合語においても観察される。

- (20) 太郎は LA 経由で日本へとんぼ帰りしたけど
 a. 次郎は *e* しなかった。(付加詞読み—あり)
 b. 次郎は *e* とんぼ帰りしなかった。(付加詞読み—なし)

3 節で論じたように、述語 X-V 複合語 [v [α -H] [$\sqrt{\text{ROOT-v}}$]]は Voice への主要部移動をせず、Voice と $\sqrt{\text{ROOT}}$ が局所関係にないために、Voice は「ス」と具現されるのであった。この分析は、(20a)の事実を正しく予測する。すなわち、(20a)は vP 削除によって派生される。

- (21) [TP 次郎は ₁ [_{NegP} [_{VoiceP} t₁ [_{vP} LA 経由で—日本に—とんぼ帰り] Voice (*si*) Neg (*nak*) T(*atta*)]]

4.3. 「-方」による名詞化：Hayashi & Fujii (2015)

本分析、特に、述語 X-V 複合語の派生における Voice への主要部移動の欠如を指示するさらなる証拠として、「方」名詞化 (Kishimoto 2006) が挙げられる。述語 X-V 複合語は通常の動詞述語とは異なり、「方」名詞化において、「X-V し方」という形式は許されず、「X-V のし方」のように助詞「ノ」の介在が必要となる。

- (22) a. 窓をから拭きする \Rightarrow 窓のから拭きのし方 (*窓のから拭きし方)
 b. 窓を拭く \Rightarrow 窓の拭き方

本分析、および、Hayashi & Fujii (2015)の提案を用いることで、この事実は正しく予測される。

Hayashi & Fujii (2015)は「ノ」の標示について以下の提案を行う。

- (23) α は is *no*-marked iff (a) N に統率され、(b)最大範疇であり、かつ、 α の主要部が痕跡でない場合において、「ノ」で標示される。 (p.38: 訳は筆者)

これにより、「～てもらう」構文において、テが付加部節の場合は、「動詞+テ」が節を越えた移動が

できない一方で、補部節の場合は、「動詞+テ」が節を越えて移動し、主動詞と複雑述語を形成すると主張する。

- (24) a. 太郎が [付加部節 次郎に ピザを 作って] お金を もらった
 b. 太郎が [補部節 次郎に ピザを 作って] 作ってもらった。

この分析が正しいとすれば、(24a, b)を「方」名詞化した際は、(23)により、付加部節の場合は線的に「作って」の右側に「ノ」が標示され、補部節の場合は標示されないことが予測される。実際に、この予測は正しい。

- (25) a. 付加部節 : 太郎の ピザを 作っての お金の もらい方
 b. 補部節 : *太郎の ピザを 作っての もらい方
 c. : 太郎の ピザの 作ってもらい方 (Hayashi & Fujii 2015: 39 に基づく)

(25a, c)は以下のように分析される。

- (26) a. 付加部節 : [NP [vP ... [TP ... ピザを 作っ-v-て]-の お金-の $t_V t_v$] [N もらい-v-方]]
 b. 補部節 : [NP [vP ... [TP ... ピザの $t_V t_v t_T$] $t_V t_v$] [N 作っ-v-て もらい-v-方]]

すなわち、付加部節では、「作っ-v-て」がTP内に止まるため、TPに「ノ」が標示される(表面的には「作っての」となる)が、補部節では、「作っ-v-て」がTPを越えて主動詞と複雑述語を形成するため、TP主要部は痕跡となり、「ノ」で標示されることはない。

これらを念頭に置くと、本分析が正しければ、vPの主要部である[v[α-H][√root-v]]はVoiceへ主要部移動をしていないため、「方」名詞化においては「ノ」で標示されるという事実を説明することができる。本分析では、(22a)は以下のように派生される。

- (27) 太郎の 窓の から拭きの し方 :
 [NP [VoiceP 太郎の [vP 窓の [[kara-H] [√fuk-v]]]の t_{Voice}] Voice(し)-方]

(27)では、vPの主要部が痕跡となっていないため、(23)によりvPが「ノ」で標示される。一方で、(22b)は(28)のように派生されるが、√fuk-v-Voiceは「方」まで主要部移動がされており、vP, VoicePはいずれも主要部が痕跡となっているために、「ノ」で標示されることはない。

- (28) 太郎の 窓の 拭き方 :
 [NP [VoiceP 太郎の [vP 窓の t_{fuk-v}] t_{Voice}] 拭き-v(ø)-Voice(ø)-方]

5. 結論

本稿では、日本語の述語 X-V 複合語に焦点を当て、「ス(ル)」の義務的介在性が、X-V 複合語の派生から導かれることを論じた。具体的には、述語 X-V 複合語のは、(i)主要部と主要部の併合、および、(ii)範疇素性の共有によるラベル付けにより派生されると提案し、これにより、複合語を形成する主要部がVoiceに主要部移動できなくなり、Voiceが「ス(ル)」として具現すると主張した。本分析を指示する証拠として、本分析から(a)述語 X-V 複合語内部での自他交替(例: 値上がり・値上げ)、(b)軽動詞残留省略における付加詞読みの有無、(c)「方」名詞化における「の」の標示についても正しく予測されることを示した。

本稿で扱えなかった問題として、なぜ複合動詞は「ス(ル)」の介在を必要としないのかが挙げられる。本稿での分析が正しいとすれば、複合動詞の場合は同じ複合でも、Voice への主要部移動が可能な構造を持つと言えるだろう。複合動詞について今後の課題としたい。

参考文献

- Akimoto, Takayuki. 2018. *The morphosyntax of transitivity in Japanese*. Ph.D. dissertation, Chuo University.
- Basilico, David. 2008. Particle verbs and benefactive double objects in English: High and low Attachment. *Natural Language and Linguistic Theory* 26:731–773.
- Chomsky, Noam. 1995. *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2013. Problems of Projection. *Lingua* 130:33–49.
- Chomsky, Noam. 2015. Problems of projection: Extensions. In Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann & Simona Matteini (eds.), *Structures, strategies and beyond: Studies in honour of Adriana Belletti*, 1–16. Amsterdam: John Benjamins.
- 長谷川拓也・大関洋平. 2020. 「分散形態論と日本語の動詞由来複合語」日本言語学会第 161 回大会.
- Hayashi, Shintaro. 2015. *Head movement in an agglutinative SOV language*. Ph.D. dissertation, Yokohama National University.
- Hayashi, Shintaro, and Tomohiro Fujii. 2015. String vacuous head movement: The case of V-*te* in Japanese. *Gengo Kenkyu* 147:31–55.
- 伊藤たかね・杉岡洋子. 2002. 『語の仕組みと語形成』 研究社
- Kratzer, Angelika. 1996. Severing the external argument from its verb. In *Phrase structure and the Lexicon*, ed. by Johan Rooryck and Laurie Zarin, 109–137. Dordrecht: Kluwer.
- Marantz, Alec. 1997. No escape from syntax: Don't try morphological analysis in the privacy of your own lexicon. In *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics 4(2)*, ed. by Alexis Dimitriadis, Laura Siegel, Clarissa Surek-Clark, and Alexander Williams, 201–225. Philadelphia: University of Pennsylvania.
- 西山國雄. 2018. 「動詞由来複合名詞と複合形容詞について」日本英語学会第 36 回大会.
- Song, Chenchen. 2020. Categorizing verb-internal modifiers. In András Bárány, Theresa Biberauer, Jamie Douglas & Sten Vikner (eds.), *Syntactic architecture and its consequences I: Syntax inside the grammar*, 357–384. Berlin: Language Science Press.
- Sugioka, Yoko. 2001. Event structure and adjuncts in Japanese deverbal compounds. *Journal of Japanese Linguistics* 17:83–108.
- Yumoto, Yoko. 2010. Variation in N-V compound verbs in Japanese. *Lingua* 120:2388–2404